

柯 志明著

『番頭家——清代臺灣族群政治與  
熟番地権——』

台北 中央研究院社会学研究所 2001年  
xxi+440pp.

岸 本 美 緒

I

本書の著者柯志明氏は、台湾の気鋭の社会学者であり、すでに日本統治時期の台湾経済に関する英文の著書 [Ka 1995] を出版しているが、本書では時代をさかのぼり、清代、特に康熙(1662~1722年)から乾隆(1736~1795年)期を中心とする台湾の「族群政治」(ethnic politics)を扱っている。主に焦点が当てられるのは「熟番」の問題である。「熟番」とは「生番」に対比される語で、台湾原住民のうち、清朝の支配下に入り、漢化しつつあった人々をさす。現在では「平埔族」という呼称が一般的であるが、著者は「平埔族」というニュートラルな語よりもむしろ当時の政治的含意を表現する「熟番」という原語を選択しているので、本評でもそれに倣うこととしたい。

それでは、著者はどのような観点から「熟番」問題を扱おうとするのか。「番頭家」(著者による英訳では The Aborigine Landlord) という書名および表紙カバーに描かれた岸裡社総通事潘敦仔の画像などを見ると、本書はもっぱら「番頭家」に率いられた熟番社会の構造を微視的に分析したものと思われるかもしれない。しかし、本書の内容を的確に表すのはむしろ、副題の「族群政治と熟番地権」の方であって、清朝が台湾の治安維持という観点からどのように原住民支配政策を推進、転換していったか、そしてその政策変遷に伴って熟番の土地に対する権利がどのように設定され、それが熟番社会の動向を

どのように規定していったか、という点に本書の主眼はおかれている。

II

豊富な内容を持つ本書を要約するのは容易ではないが、以下簡単にその論点を紹介してみたい。本書の方法を述べた第1章「導論」を除き、本論は大きく2部に分かれる。第1部は、時間的順序に即して清朝の族群政治と熟番地の地権制度の変遷を克明に辿る「歴史叙述」的な部分である。儒教的な世界観の特質たる文化主義の普遍主義は、文化的・政治的な権威の中心たる天子から文化の恩恵に浴しつつある熟番、いまだ浴していない生番まで段階的に文化の程度が低下していく同心円的世界像を描き、その外縁に位置する熟番・生番もいずれは中国文化のなかに包摂されていくことを期待するものであるとされるが、台湾の生番・熟番に対する清朝の政策は、必ずしも帰化と包摂をめざすものではなく、むしろ治安維持の見地から漢人と生番・熟番との区別分離を指向していた(第2章「族群政治」)。康熙年間の台湾占領(1683年)以来、清朝は封禁政策をとって漢人の入植を抑えようとしたが、密航や番地の私墾、武官や豪強地主の土地集積により、そうした消極政策は限界に直面していた(第3章「清初の封禁下における番・漢地権の取扱い」)。番地を荒地と称して開墾許可を受ける方法や、「社餉」(番社〔熟番村落〕にかかる税)の肩代わりを条件に私的に番地を開墾するなどの方法で、事実上、番地は漢人の手に流出していた(第4章「熟番地の開墾と官の介入」)。雍正5年(1727年)以降、清朝は漢人が私的に開墾した番地を申告させ、その所有を認めるとともに土地税をかける政策に転じ、また熟番の開墾地に対しても同様の所有を認める措置をとったが、こうした改革は経済的な弱者たる熟番の手から売買の形式で公然と土地が流出する道を開くこととなった(第5章「土地税改革と番地の開禁」)。その結果、雍正年間末には貧窮化した熟番の暴動が起きたため、清朝は再び漢人の番地開墾を禁止し、漢番隔離を図る政策に転じた(第6章「熟番暴動と番地の再封禁」)。

雍正年間の熟番の貧困化と反乱弾圧による弱化に伴い、熟番は「界内」すなわち生番の住む山地と平野部とを隔離する境界の内側（平野部）の土地を失って、「界外」の山よりの土地に移動していた。その状況を利用して打ち出されたのが福建布政使高山の「三層制」構想であり、山沿いの平地に熟番を配置して平野の漢人と山地の生番の間の緩衝装置となしつつ、三者の分離を図るというものであった。熟番の武力を利用して境界の守備を行う「隘番制」も施行された（第7章「族群同盟戦略と三層制族群分布制度」）。清朝が台湾の治安維持に熟番を利用する体制が確立するに伴って、熟番の生計を保障するための「恤番」政策が次々と採用された。山沿いの平地や脱税により没収された土地が熟番に属する土地として確保されたほか、熟番の土地は自耕であれ漢人に耕作させる場合であれ免税とされ、また漢人佃戸が熟番に支払う租額が公定された。さらに熟番保護の機構として理番同知衙門が設置され、漢人と熟番との土地紛争についても熟番に有利な判定が行われた（第8章「熟番地保護の安定」）。しかし、漢人の界外進出はやまず、乾隆年間後期の諸動乱、なかでも1786年に勃発した林爽文の乱は、漢人が生番の住む山地を根城に活動する現状を福康安ら清朝官僚に認識させた。この乱で熟番が示した清朝への忠誠は、清朝と熟番との同盟関係をさらに強化させ、熟番の壮丁を民兵団に組織して屯田や「養贍埔地」（民兵となった熟番の生活保障用に与えられる土地）の収入をその俸給にあてる「屯番制」が新たに作られた。清朝は、漢人・熟番・生番の接触を制限しようとする従来の空間的隔離政策を変更し、漢人の界外進出を容認するとともに、熟番の武力を単に境界の防備のみならず、界内の漢人反乱を鎮圧するための軍事力としても用いようとしたのである。この時期に形成された体制が、その後清末の劉銘伝の改革に至るまで、ほぼ持続することとなった（第9章「三層制族群分布制度の危機と再建」）。

以上、第1部では時期を追って歴史的に叙述されてきた内容が、以下の第2部ではテーマに即して体系的に再整理されている。従って内容的には第1部と重なる部分も多く、やや重複的な印象を与えると

ころもある（第12章など）が、第1部と第2部とが組み合わさって立体的な構造が形作られている。

第10章「熟番地権の分類と展開」は、「番租」といった語で表される熟番の土地収益権の性格につき、その諸類型を歴史的な文脈のなかで解析している。ここで主要な批判対象となっているのは『台湾私法』における日本の学者の「番租」理解である。著者によれば、『台湾私法』は、乾隆末年に成立した番租類型、すなわち漢人墾戸が実際の耕作農民から小租を徴収してその一部を「番大租」として番社に支払い、その税が免除されているような形態を「番租」の標準的形態としたうえで、それ以前の形態を標準型への進化の過渡的形態とするか、そうでなければ例外的逸脱形態とする。しかし、「番租」の多様な形態は決して直線的な進化の各段階の所産ではなく、清朝の試行錯誤的な政策展開のなかで形成されてきたのであり、そうした歴史的背景を捨象するならば、それぞれの類型の歴史的意味を正しく理解することはできないであろう、と著者は論ずる。

第11章「番租の保護と分布」および第12章「『熟番地権の展開』」では、アメリカの研究者シェファード（John Shepherd）の著書〔Shepherd 1993〕の論点の再検討を行う。国家的負担の大きさや漢人の進出により熟番が土地を失って流離していったという通説に対し、シェファードは、清朝は民間の土地慣行に順応しつつ熟番地権に対して有効な保護政策を取り、その結果、「番租」を支払う土地は20世紀初頭に至るまで台湾西部の（界内）平野地帯にも広範に残存していた、とする。それに対し本書では、日本統治初期の土地申告書と清末の淡新檔案（淡水庁＝新竹県の地方政府の行政文書）を用いて数量的な検討を行い、シェファードの所説を批判すると同時に通説をも批判する。すなわち、清末の「番租」の所在地は、シェファードの言うような界内平野ではなく、境界周辺やその外側の保留区に集中している。このことは、シェファード説の如く清朝が熟番のもとと持っていた土地を保護したのではなく、いったん土地を手放して流離した熟番に対して清朝が政策的に土地を与えてそれを保護したということを示している。他方で著者は、熟番は通説的に論じ

られるように一方的に土地を手放して流離していったのではなく、清朝の政策によって「新しく配置」されたのである。として、「ブッシュ要因」のみならず「ブル要因」にも留意すべきことを指摘する。ここでは、「流離説」(通説)と「反流離説」(シェファード)のいずれとも異なる第3の説が実証的に提示されているのである。

第12章では、シェファードの「民間慣行順応説」を批判し、清朝が政策的な配慮に基づき、一般的な民間慣行と抵触するような土地制度を政治的強制力によって作り上げていったことを論じている。第13章の「結論——歴史制度論的分析——」では、本書の論点の要約とともに方法的な含意についても述べているが、そうした本書の方法的特徴については、以下にまとめて論ずることにしたい。

### III

本書の主要部分(第1部)は、時期を追って清朝の族群政治と熟番地の地権制度の変遷を克明に辿ることに割かれており、本書は一見したところ極めて正統的な実証的歴史学の著作とも見える。第2部もそうした実証的な事実発見を体系的に組み直したものであって、新奇な外来の理論が導入されているというわけではない。本書で論じられる制度の変遷はかなり込み入ってはいるが、著者の丁寧な論証と、随所に挿入される概念図や詳細な地図によって、私のような台湾史の門外漢にもはっきりと理解できるものとなっている。特に第10章の各種「番租」の性格など、従来ぼんやりとしか認識していなかったものが、本書によってくっきりと「見えて」きたと言っても過言ではない。このように、本書の叙述方法は非常に具体的・実証的であり、社会学者の著作として、一般論的なモデルやゲーム理論の類を予想していた読者は、やや意外の感に打たれることになるかも知れない。

しかしそれは無論、本書における方法的意識の希薄さを意味するものではない。本書の具体的・実証的な研究方法がむしろ、社会学者としての著者の極めて自覚的な方法意識の所産であることは、導論や

結論における明示的な議論から明らかである。著者は本書で、固有の空間的・時間的文脈を離れた抽象化された一般理論ではなく、別の形の「理論」を模索する。著者が追求するのは、机上で設計図を引く設計士ではなく、原料を扱いながら調整していく大工のように「歴史を用いて理論を発展させる」ことである。また、目的論的な直線状の発展論ではなく、社会的過程の「経路依存性」(path dependency)を重視する。従って、清代台湾の熟番社会の動向についても、不確実性のなかでの試行錯誤的な選択によって事態が展開してきた過程を具体的に跡付けようとするのである。このような著者の自覚的な方法的態度は、我々歴史研究者にとっても学ぶべきものと言えよう。一見「事実」に即して論じているように見えながら、その実、結果論的な一種の予断に捕らわれているということは、方法的な無自覚さのなかに往々にして伏在する陥穽だからである。

それでは、著者は、事態をそのように展開させてきた主な要因を、どこに見出しているのだろうか。清代台湾の熟番社会の動向については無数の要因の絡み合いを考えることができるであろうが、著者はそのなかでどの方面を最も重視しているのであろうか。本書を読んでまず受ける印象は、清朝の「族群政治」が熟番社会に与えた影響の大きさである。本書の大きな部分は、清朝国家の政策変遷に関する檔案史料を多用した克明な分析に割かれており、本書はその意味で政治過程に力点を置いた研究であると言えよう。これを例えば同じく「熟番地権」の展開を扱った陳秋坤の先行する著書[陳1994]と比較してみると、陳氏の著書が岸裡社というひとつの番社を取り上げて、土地価格や生産量、租額の変化など数量的側面に留意しつつ社会経済的な観点から土地所有の変動を扱っているのに対し、本書の焦点はより巨視的な見地からの政策変遷と制度変化におかれていると言ってよいだろう。

しかし一方で著者は、国家の政策が制度の変革を通じてスムーズに社会全体に貫徹していくという楽観的な「国家中心」論を採用しているわけではない。本書を通じて読者を引きつけるのは、国家の政策が必ずしも所期の成果を生み出さず挫折したり、逆に

意図せざる副作用をもたらしたり、またその意図せざる結果を逆利用して官僚が新たな政策を打ち出したり、といった「国家」（皇帝や地方官僚）の側と「社会」（漢人や熟番）の側との複雑な相互作用である。台湾社会の変遷における「上からの」政策の作用とともに「下からの」対応を重視し、また人々の行動を規定する「制度」の力とともに、制度の抜け穴を利用したり反乱を起こしたりして制度変革を余儀なくさせていく多数の人々の行為にも注目する——そうしたダイナミックな歴史像を提示している点に本書の魅力が存在するといえる。ただ、本書においては、政府側の政策決定過程の十分に厚みある分析に比較して、熟番や漢人たちの直面したさまざまな選択肢やその間の戦略的決定過程はやや後景に退いているように思われる。清代台湾の熟番地権の変動をゲームに例えるならば、本書が目指すのは、当事者双方が戦う市場的なゲームの展開過程よりも、国家が試合の展開に介入してゲームの規則を細かく改定していく過程にあるといえよう。

## IV

最後に、本書が提起する「社会学と歴史学との関係」の問題につき、若干の感想を述べて著者および読者各位のご指教を得たい。社会学と歴史学との関係の現状につき、著者は「聾者間の会話」、「鶏が鴨としゃべる」といった比喩でその対話困難性を指摘しているが、歴史学が専門である私自身の経験から言えば、私が今まで心から面白いと思ひ、大きな影響を受けた歴史研究は、多かれ少なかれ社会的傾向のある研究——歴史事実に即しながらも人間行動に関する普遍化可能性 (universalizability) を秘めた研究——であったと思う。著者が本書で提示した「経路依存性」の論点につき、私も賛同するものであるが、「経路依存性」という語は實際上、大きな解釈の幅を許すものであるように思われる。錯綜した経路の果ての誰にも予測できない結末、という点に重心をおくならば、この語は個別具体的な事例の偶然性を強調する方向へと傾斜していくであろう。一方で、「大体同じ経路ならば同じ結末が導かれる

筈だ」という点を重視するならば、そこには固い普遍理論ではないにせよ、柔軟な形での普遍化可能性が開かれるであろう。著者が本書で示したような「経路」は、どの程度そうした普遍化可能性を持つものであろうか。

少数民族と漢人との接触のもたらす社会変動や、新開地での地権の複雑な展開は、同時期、台湾以外の辺境地域でも広範に見られたものであった。そのなかで、台湾の事例はどの程度特殊なのであろうか。例えば福康安を陣没させた18世紀末貴州・湖南のミャオ族反乱とその善後政策は、台湾の事態とどの程度共通性を持ち、また何故、どのように異なるのか。台湾における清朝の「族群政治」は、もっぱら台湾の事情にのみ対応して展開されたのであろうか。それとも西南少数民族地区の経験にも学びつつ、全国的な「族群政治」の一環として位置付けられていたのか。

本書は、抽象的な一般理論への寄りかかりを厳しく避けながら、むしろそれ故に台湾史を超えた広い範囲の読者を思索へと誘う書物である。門外漢のため誤解や不適切な評言があるであろうことをお詫びするとともに、そうした思索の機会を与えていただいたことを感謝したい。

## 文献リスト

## &lt;中国語文献&gt;

陳秋坤 1994. 『清代台湾土著地権——官僚、漢佃與岸裡社的土地變遷, 1700-1895——』中央研究院近代史研究所。

## &lt;英語文献&gt;

Ka, Chih-ming 1995. *Japanese Colonialism in Taiwan: Land Tenure, Development, and Dependency, 1896-1945*. Boulder, Colorado: Westview Press.

Shepherd, John 1993. *Statecraft and Political Economy on the Taiwan Frontier, 1600-1800*. Stanford: Stanford University Press.

(東京大学大学院人文社会系研究科教授)